

SHOW HEY シネマールム

★★★

ネルーダ 大いなる愛の逃亡者

2016年/チリ・アルゼンチン・フランス・スペイン映画

配給：東北新社・STAR CHANNEL MOVIES/108分

2017(平成29)年12月16日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督：パブロ・ラライン

出演：ルイス・ニュッコ／ガエル・
ガルシア・ベルナル／メルセ
デス・モラーン

■ショートコメント■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

英雄的ノーベル文学賞詩人を誕生させた背景とは



詩人として1971年にノーベル文学賞を受賞したチリの国民的英雄、パブロ・ネルーダは、共産主義の政治家であった。芸術を愛し、女性を愛し、酒場を愛する享楽主義者であり、何よりも貧しい人々に寄り添う博愛主義者だった。しかし、その思想ゆえ、ネルーダは生涯の大半をチリ政府から追われる逃亡生活に費やした。ただ、その逃亡生活こそ、ノーベル文学賞を受賞した糧となったのである。その逃亡生活とは何だったのか。本作は、弾圧のなかで、人々がネルーダを愛し、そして代表作「大いなる歌」を愛した背景に迫った意欲作である。

ネルーダの魅力はその多面性にある。詩に託したものは恋愛や自然だけではなく、政治や権力批判にまで及んだ。上院議員でアルゼンチン貴族の妻をめとり、画家のピカソなど稀代の芸術家たちと親密な交流を持つ一方、貧しい労働者階級の人々にも目を向けた共産党員でもあった。誰にでも愛情を注ぐ博愛主義者かと思えば、女性や酒場が好きで、逃亡中でさえ、その享楽的な生活をやめなかった。本作は、ネルーダが逃亡した謎の1年である1948年にスポットを当てているが、それだけでも彼の人間性を余すところなく伝えている。名作『イル・ポステイノ』(1994年)ではネルーダとナポリの貧しい郵便配達員の友情を描き、貴賤や地位に関わらず、等しく人々と付き合うネルーダの人格がモチーフとなったが、本作は、より幅広いネルーダの人間性を描き出している。

チリ人監督、パブロ・ララインの斬新で叙情的なサスペンス

ネルーダと同じチリ人の監督であるパブロ・ララインが祖国の美しい自然や第2次世界大戦直後の混乱期の生活を織り交ぜ、斬新で叙情的なサスペンス映画に仕立て上げた。メキシコを代表する俳優のガエル・ガルシア・ベルナルがネルーダを追跡する警官ベルショノーを演じる。ラライン監督は警官ベルショノーを語り部に据え、追跡者でありながら次第にネルーダに魅了されていく心の内を語らせ、特異なサスペンス映画に仕上げた。ベルショノーの詩的台詞はネルーダの内なる声とも取れ、追われる者と追う者2人が表裏一体の存在ということがわかる。ネルーダにはチリで人気のコメディアン・俳優ルイス・ニエッコ、アルゼンチン人貴族の妻デリアにはアルゼンチンの人気女優メルセデス・モラーンを配し、キャストिंगは国際色豊かだ。

脚本家ギレルモ・カルデロン の存在もラライン監督を助けた。第69回カンヌ国際映画祭の監督週間に出品以後、本作の脚本を評価する声も高まった。随所に入るネルーダの詩、「二十の愛の詩と一つの絶望の歌」は愛を語らせ、「大いなる歌」は自然を讃え、時には無力な人々に声を与えた。音楽担当のフェデリコ・フンドは北欧の著名作曲家グリーグの「ノルウェーの旋律」を挿入し、その物悲しげな旋律で映画の底流に流れる寂寥感や人間の美しさを奏でた。

ネルーダの信奉者であるラライン監督のもとに、ラライン監督映画の常連俳優やスタッフが集まり、ネルーダの人生で最も謎多き地下潜伏と逃亡の時期を世に送り出した映画だが、その劇中の詩に潜む深い意味を堪能できる映画でもある。



◆公式ホームページによれば、本作の「ストーリー」は次の通りだ。

第2次世界大戦の終結から3年、ピデラ大統領は共産党員のネルーダを弾劾した。逮捕されるか逃亡するか？
大統領は直接警官ベルショノーに、ネルーダの逮捕を命じる。
ネルーダは追われる身としての新たな生活にインスピレーションを受けながら、代表作となる詩集「大いなる歌」を書く。
ベルショノーが追いつくと姿をくらます、追いかけてこの連続だ。
ネルーダはわざと手がかりを残すことでベルショノーと戯れ、追跡ゲームはより危険なものに、
2人の関係はより密接なものになっていくのだった…

◆公式ホームページによれば、ノーベル文学賞を受賞したネルーダの「人物像」は、次の通りだ。



◆今年のノーベル文学賞は、日本生まれで英国籍の作家であるガズオ・イシグロ氏が受賞したため、近時はその話題でもちきり。2012年に中国人作家の莫言氏がノーベル文学賞を受賞した時は、その1年前にその莫言氏と私の事務所で対談していただけに大いに興奮したが、今回も、『わたしを離さないで』（10年）（『シネマルーム26』98頁参照）の映画でイシグロ氏のことをよく知っていただけに、私は現在それらの新聞記事を興味深く読んでいる。

◆去る11月23日に観た『笑う故郷』（16年）では、アルゼンチンではじめてノーベル文学賞を受賞したダニエル・マントバーニのことを知って面白かった。しかして、本作のタイトルになっている『ネルーダ』も、1971年にチリではじめてノーベル文学賞を受賞した人らしいが、私は全く知らなかった。ところで、『大いなる愛の逃亡者』という副題の意味は・・・？

本作の「イントロダクション」と「ストーリー」を読んで、私は「これは必見！」と思って映画館に行ったが、中はガラガラ。これはきっと、私以上に日本人はネルーダのことを知らないためだろう。

◆チリといえば、1970年9月の大統領選挙でアジェンデが選出され、チリ初の民主的選挙による人民連立政府（社会主義政権）が誕生したことが有名。その誕生と崩壊を描いた『チリの闘い』（75～79年）第1部、第2部、第3部は、素晴らしい映画だ（『シネマルーム39』54頁参照）。

ネルーダのノーベル文学賞受賞は1971年のことだから、このアジェンデ大統領誕生の時期と重なっていた。本作では、共産党員であったがために、時のチリの大統領から迫害される姿が描かれるが、アジェンデ政権が誕生した当時彼は優遇されたの？そんな興味も湧いてきたが、ネルーダはピノチェトによる軍事クーデターでアジェンデ大統領が死亡（自殺？）した数日後に死亡したらしい。

そこらあたりも興味深いところだが、本作はそれを描くものではなく、追跡者になる警官ペルシヨノー（ガエル・ガルシア・ベルナル）と逃亡者になるネルーダ（ルイス・ニエッコ）との追いかっこのサマを描くものだ。

◆ミュージカルの『レ・ミゼラブル』も、映画の『レ・ミゼラブル』（12年）（『シネマルーム30』48頁参照）も、中盤は追跡者ジャベール警部と逃亡者ジャン・バルジャンとの追いかっこのハラハラドキドキの展開を見せたが、さて、本作の追いかっこのは・・・？ジャベール警部はジャン・バルジャンから助けられたことに絶望して自殺してしまったが、大統領からの直命でネルーダを追うペルシヨノー刑事は如何に・・・？

本作の結末は私には意外で全く想像できないものだったから、ビックリ！本作が、どこまで史実に基づいているのかは知らないが、劇中何度も語られるネルーダの詩を味わいながら、ネルーダの奇想天外な人柄をしっかり確認したい。そして、その人物を追跡しながら

ら、どことなくその人生に魅了されていく警官ペルシヨノーの人物像にも注目したい。

2017（平成29）年12月18日記